

産育儀礼における腹帯の実態と動向の検討

— 愛知県名古屋市の社寺の事例から —

ムカルジー ヒヤ*

キーワード

愛知県名古屋市、腹帯祝い、産育儀礼、社寺の事例、腹帯の種類

目次

- I はじめに
- II 先行研究と問題提起
 - 1 腹帯の習俗について
 - 2 時代の変遷に伴う腹帯祝いの習俗の変化
 - 3 腹帯に用いられる色彩の意義
 - 4 本研究の目的
 - 5 愛知県および名古屋市の産育儀礼と調査の概要
- III 腹帯祝いの習俗の現状——名古屋市の社寺の事例を通して
 - 1 塩竈神社
 - 2 伊奴神社
 - 3 熱田神宮
 - 4 興正寺
- IV 考察
- V 今後の課題

I はじめに

日本における産育儀礼やそれに関連する習俗・信仰・言い伝えなどは、自宅出産から病院出産への移行を始めとする時代の変遷のなかで、地域ごとに異なる変化を見せてきたことがしばしば指摘される。日本全国の社寺でおこなわれる産育儀礼でも、とりわけ2010年前後から多様化が顕著となり、特に腹帯祝いに関する田口裕子の研究によれば、最近の妊婦の祈願者の好みや利便性を考慮して、安産の祈祷の際に、参拝される社寺の関係者の介入により、安産祈願に不可欠な要素と考えられる腹帯の形態の種類の追加が導入された。特に従来の伝統的な御晒の腹帯の他に、現代風の多様な種類の腹帯としてベルト式、コルセットタ

イプ、マタニティタイプ、ガードルタイプ、パンツ型タイプ、腹巻タイプなどが授与され始めた。さらに、腹帯の種類の追加だけではなく、時代の変遷のなかで、日常生活の急速な変化などによって、盛大に腹帯祝いをするという習慣が、現在では腹帯のお祓いを残すのみとなったという。また、このような現代風の腹帯は着脱が非常に簡単であるため、最近では妊婦自身がそれらを準備し、お祓いのために、直接社寺まで持参する傾向が新しく見られるようになった。その結果として、もともとは、伝統的な御晒の腹帯だけを用意し、安産の祈祷の際に妊婦に授与していた社寺側の関係者により、現代風の多様な種類の腹帯を提供するようになったと指摘している（田口 2011: 107-129）。

こうした腹帯の種類の追加や習俗の変化、腹帯に押

* 名古屋大学大学院

す判子¹のデザイン、用いられる色彩の意義や腹帯の役割について論じた先行研究は相応に蓄積されてきたが、社寺側の関係者により、いつ頃からこのような腹帯の習俗の変化や種類の追加が現れ始めたのか、なぜ社寺側から意図的に現代風の腹帯が準備され始めたのか、腹帯のお祓いを求めてどれほどの妊婦の祈願者が各社寺に参詣しているのか、安産祈願の際に妊婦が自分自身で腹帯を持参することが多いのか、それとも社寺側から授与されることが多いのか、社寺側から授与される場合、妊婦がどの色彩やどの種類の腹帯を優先するのか、妊婦により持参される場合、どの色彩の腹帯の割合が多いのか、このような腹帯の習慣の変化は特定の地域の社寺に限って見られるのか、それとも日本全国の社寺でも同じように腹帯の習慣の変化が生じ始めたのか、といった多様な点については、これまでになされた腹帯に関する先行研究では、何も詳細に記述されていない。そのため、筆者はこの研究ノートを通して、これらの点に徹底的に注目するために、事例として、これまでにほとんど報告されることのなかった、愛知県名古屋市内の安産祈願先として篤く信仰を集めている社寺(天白区の塩竈神社、西区の伊奴神社、熱田区の熱田神宮、昭和区の八事山興正寺)のそれぞれの腹帯祝いを取り上げる。その上で四カ所の事例に注目し、同じ名古屋市内の社寺において、腹帯の習俗の変化にいかなる類似点と相違点があるのかを明らかにする。

II 先行研究と問題提起

1 腹帯の習俗について

腹帯の習俗に関する先行研究と問題提起に触れる前に、まず腹帯の習俗とは、基本的にはどのようなものなのかに言及しておきたい。日本では女性が妊娠すると、妊娠五カ月目頃、縁起の良い日とされる「戌の日」に、社寺のお祓いを受けた腹帯をお腹に締める習俗があり、これは古代からの日本独特の習慣であると考えられてきた。また、腹帯祝いの起源については、日本の古代書物である『古事記』や『日本書紀』には、紀元後三世頃、朝鮮半島新羅の征伐に赴いた時、神功皇后が産気づいたため、腹帯に小石を挟んで陣痛をしずめ、帰国後無事に元気な男の子を出産した

との話があり、これが腹帯の起源と関連していると思われる。さらに、腹帯の意義に関しては、腹帯を付けることにより妊婦の見た目も変化を遂げて、胎児の存在を広く知らしめることができるほか、「帯」を締めることにより、単に妊婦の安全だけではなく胎児の靈魂を安定させることができると考えられてきた。その他、「戌の日」に関しては、一度に多くの子犬を無事に産むことができる動物の犬にあやかるために、妊婦にとって縁起の良い日とされる「戌の日」が選ばれることが指摘されている(鎌田他 1990: 49-60)。

また、腹帯の習俗の継続性については、以前は、自宅出産が当たり前のことであったため、当時の妊婦が社寺の神仏のご加護を求めて、社寺でお祓いをしていた腹帯を締める習慣には一定の合理性があると思われる。しかし、第二次世界大戦開始前後頃から、助産師のみならず医師が検査や出産に介入できるようになり、出産の前後に危険が発生した際に医師が外科的な処置も含めて対応可能になったものの、病院出産の場合においても、出産に伴う母子の死亡リスクは完全になくなったとは思えない。そのため、従来の習慣のとおり、今でも女性が妊娠し安定期に入ると、妊婦のお腹を支え、お腹のなかにいる貴重な生命(胎児)をしっかりと守る意味合いで、腹帯を締め続けていると思われる。ただし、特に鎌田他の解釈によれば、医学的な立場から考えると、安定期に腹帯を締めることで、効果があることがまだ立証されていないが、妊娠・出産に関わる医学技術がどれほど進歩しても、自宅出産から病院出産への移行があっても、今でも従来のように、妊婦が妊娠の安定期に入ると、腹帯を締める習慣に従う事例が数多くみられることから、腹帯の習俗には、医学的な意味合いよりも、文化的な意味合い、つまり古代から続いてきた腹帯の習慣の伝統的な意味合いが深く含まれていると考えられる(鎌田他 1990: 48)。

2 時代の変遷に伴う腹帯祝いの習俗の変化

日本民俗学並びに文化人類学において、産育儀礼に関する研究は相応に蓄積されてきた。特に、安産祈願と腹帯の習俗の変化・腹帯の種類の追加などについて論じた先行研究が数多く見られる。例えば田口は、「現代における安産祈願の実態とその背景」という論

1 腹帯に判子を押すとは、その特定の社寺からお祓いして受けた証拠のことを意味する。

文において、東京都内の八カ所の神社の事例を取り上げ、時代の変遷に伴い、腹帯の用意の仕方や形態、腹帯の祝い方²に見られる変化と現状を検討し、以前は実家から腹帯が贈られることが多かったが、最近では、社寺側から妊婦に直接授与されるようになったこと、妊婦が自分自身で用意した腹帯を社寺まで持っていきお祓いしてもらい習俗へと変化していること、伝統的な御晒から腹巻型やガードル型タイプへの推移、明治・大正の頃までは、安産祈願と腹帯の習俗が別々になされていたが、最近では、この二つの習俗が一つにまとめられ、同時におこなわれるように変化してきたこと、従来のおお初めに腹帯を締める際に他の人をお供で共食する盛大な腹帯祝いは、現在あまりみられなくなってきたこと、といった多様な変化を指摘している（田口 2011: 107-129）。

田口は、腹巻型やガードル型の腹帯は、犬印本舗が、昭和三〇年（1955）頃妊婦用の衣類や用品のメーカーとして設立されたと思われる。腹帯の御晒をより使いやすくするために開発したものであり、昭和三〇年（1955）より使い始められていることを指摘している。しかし、田口の研究では、そこで取り上げられた社寺の事例の場合、各社寺独自の歴史を背景にして、どのように腹帯の習俗がなされるのか、なぜ最近の妊婦は伝統的な御晒よりも現代風の腹帯を好むのか、どれほどの妊婦が腹帯のお祓いを求めて各社寺に参詣するのか、なぜ別々になされていた安産祈願と腹帯祝いの習俗が、同時にまとめられるようになったのか、最近の妊婦がどの色彩の腹帯を持参するのかを、社寺側の視点から詳細に検討していないだけではなく、特定の東京都内の八カ所の神社の事例のみに限定しているため、日本の他の地域における、腹帯の習俗の現状を予想するのはなかなか難しい。

その他、内藤美奈は「住吉大社の腹帯に関して」において、大阪市住吉区の住吉大社の事例を取り上げ、以前は安産祈願の際に本神社から妊婦に対して「安産帯」³と呼ばれる伝統的な御晒の腹帯だけが授与されたが、現代では、妊婦が自分自身でマタニティ用のコルセットタイプやガードルタイプのような現代風のを準備し、持参する事例が増えたことで、住吉大社から御晒の腹帯の他に、現代風の腹帯が授与されるよう

になったこと、最近では、しっかりとした安産の祈禱を受けることが減り、妊婦は祈禱を受けないままお祓い済の伝統的な御晒の腹帯か、現代風の形式の腹帯を選択して受け取ることが多く見られることを指摘している（内藤 2010: 111-116）。ただし、内藤の研究は、なぜ伝統的な御晒の腹帯から現代風の多様な種類の腹帯の追加が必要になったのか、いつ頃からこのような腹帯の種類の追加が導入されたのか、なぜ妊婦の祈願者が安産祈禱を受けずに、腹帯のお祓いだけを求めるのか、お祓いを受けるために、どれほどの妊婦の祈願者が住吉大社に参詣するのかなどの点についての詳細な情報が皆無に等しい。

さらに、内藤は「対馬の産育習俗(2)八幡宮神社の腹帯祝いと初参り」という論文において、長崎県の対馬の八幡宮神社の事例を取り上げ、従来は安産祈願の際に腹帯として妊婦が白い色の御晒の腹帯だけを持参する習慣があったが、最近では、安産祈願の際に八幡宮神社を訪れる妊婦の多くは御晒ではなく、現代風のパンツ型の衣類を腹帯の代替品にするようになったことを指摘している（内藤 1999: 93-99）。しかし、内藤の研究では、いつ頃から妊婦の祈願者により、このような新しい形態の腹帯が持参され始めたのか、なぜ妊婦の祈願者は御晒を好まないのか、本神社から腹帯を受ける場合、妊婦に対してどのような腹帯が授与されるのか、どれほどの妊婦が腹帯のお祓いを求めて、八幡宮神社に参拝するのか、伝統的な御晒の腹帯からパンツ型の衣類への推移について社寺側の関係者はどう思っているのか、といった点については、詳細に検討されていないだけではなく、内藤の研究は、特定の大阪市の住吉大社と長崎県対馬の八幡宮神社の事例のみに限定しているため、日本の他の地域の社寺の場合、腹帯の習俗の現状がどうなっているのかを検討する必要があると考えられる。

また内藤は、「腹帯の赤—赤色が持つ呪力について」という論文において、大阪市の住吉大社の事例を取り上げ、本神社から授与される伝統的な白い色の御晒は、もともと手書きの「住吉大社」という文字や朱色で本神社の紋様を描く習俗があったが、時代の変遷に伴い、参拝者の数が増えたことで、現代では手書きの代わりに縫製業者によって、「住吉大社」と朱色でプ

2 従来と比べると、現代では女性が妊娠したら、妊娠の五カ月目にお腹に腹帯を締めて、赤飯を食べて、盛大にお祝いする習慣がもう失われてきたことを意味する。

3 この神社の場合、授与される「安産帯」は「アンザンオビ」や「アンザンタイ」と呼ばれる。

リントされるようになったこと、本神社の紋様に用いられる色彩が、従来のように朱色ではなく紫色がかった赤い色へと変化してきたことを指摘している。だが、いつ頃からこのような変化が生じたのか、なぜ神社側の関係者がこのような変化を必要と感じたのか、腹帯に押す判子の色彩はいかに変化したのか、といった点について、神社側の関係者に対して徹底的に聞き取り調査を実施して、詳細に検討することはしていない (内藤 2013: 52-64)。

3 腹帯に用いられる色彩の意義

内藤は先に挙げた「腹帯の赤—赤色が持つ呪力について」という論文において、なぜ腹帯に紅白の色が用いられるのか、日本ではなぜ赤い色が呪力を持っていると考えられるのかを検討している。それによれば、赤い色は人間の心身に力をつける効果があると考えられ、乳幼児の死亡のような凶事にも、妊娠している女性たちが胎児を宿している腹部に巻く腹帯にも、精神的な力を与えると考えられるため、意図的に腹帯に紅白⁴というめでたい色彩が用いられる習慣があるという。内藤は、同論文では、赤い色は妊婦と胎児の魔除けの色に限らず、妊婦の心身を安定させ、心身に活力を与え、生まれてくる赤子にも生き延びる力を与える力を持っているため、赤い色は呪力の色であると報告している。一方、内藤の研究は、時代の変遷に伴い、変化を見せてきた腹帯の習慣において、現代の妊婦が腹帯に用いられる色彩に対してどれほどのこだわりを見せるのか、腹帯に用いられる色彩をどれほど重視するのか、妊婦は赤い色を呪力の色だと考えているのか、といった点についての詳細な情報が皆無に等しい。

先に言及した先行研究を見ると、田口・内藤の研究はいずれも、注目した事柄に顕著な偏りが見られ、特に田口の研究が東京都に、内藤の研究が大阪市の住吉大社と長崎県対馬の八幡宮神社の事例に限定しているため、腹帯に関わる儀礼や習慣の全体像、つまり他の地域の社寺の場合、日本各地の地域ごとのバリエーションと全国的な共通性について考えることができていない。腹帯に関わる儀礼や習慣の変遷の全体像を捉

え、腹帯の習俗の現状を明らかにするためには、分析の対象地域を増やし、より微細な点について分析を深める必要があるだろう。

4 本研究の目的

本研究ノートでは、愛知県名古屋市の事例を対象とし、安産祈願先として篤く信仰を受けている名古屋市内の塩竈神社・伊奴神社・熱田神宮・興正寺の四つの社寺の事例に注目する。さらに、各社寺側の関係者に対して実施した聞き取り調査から、それぞれの社寺の創建の歴史と由来、妊婦が安産祈願や腹帯のお祓いを受けるためにこれらの特定の社寺を選んで訪れる理由、以前は安産祈願の際に腹帯として妊婦にどのようなものが授与されたのか、以前と比較して最近では、これらの社寺から腹帯としてどのようなものが授与されているのか、なぜ授与されているのか、妊婦に授与される腹帯には何か特定の呼び名があるのか、その特定の呼び名はどのような意味を表すのか、最近の妊婦により持参されるのは、伝統的な御晒か現代風の腹帯かどちらの比率が高いのか、社寺側から直接腹帯が授与されることが多いのか、なぜ現代の妊婦は伝統的な御晒よりも現代風の腹帯を選ぶのか、腹帯祝いの習俗の現状はどうなっているのかを記述する。最後に、民俗学や文化人類学の立場から、それぞれの点について各社寺の例を詳細に比較することで、共通点と相違点を明らかにすることを目的としている。本研究ノートは、腹帯祝いの習俗の研究に対して一定の資料的貢献が可能であると考えられる。さらに、本研究ノートの学術的貢献については、愛知県名古屋市の事例を取り上げて、腹帯に関わる儀礼や習慣の変遷の全体像を捉え、腹帯祝いの習慣の現状を明らかにすることによって、愛知県名古屋市の腹帯の現状を詳細に報告することができるのではないだろうか。

5 愛知県および名古屋市の産育儀礼と調査の概要

最初になぜ名古屋市の事例を取り上げる必要があるのかに触れておこう。産育儀礼に関する日本民俗学の重要な資料である『日本産育習俗資料集成』⁵において、

4 「紅白」とは、赤い色と白い色の組み合わせのことで、めでたい色だと考えられる。日本では、紅白という言葉を使用してさまざまな言葉が用いられる。例えば、「紅白幕」、「紅白歌合戦」、「紅白餅」、「紅白まんじゅう」などである。また「紅白」はハレを意味し、結婚式や祭りなどの縁起のいい行事や出産儀礼では、「紅白」という色が大切にされている。

5 第二次世界大戦前に日本全国における産育儀礼やそれに関する習俗については徹底的に民俗調査が実施され、その調査の成果が詳細に収められている日本民俗学の貴重な資料である。

愛知県の腹帯の項目を見ると、主に愛知県の知多郡、額田郡、中島郡、丹羽郡、北設楽郡、南設楽郡、海部郡などの地域で、腹帯祝いは何と呼ばれるのか、腹帯は誰により準備されていたのか、妊娠後のいつ頃に腹帯を締める習慣があったのかについての情報は記述されているが、同時期の名古屋市内の事例については、何も論じられていない。つまり、第二次世界大戦前の名古屋市内において、どのような腹帯の習俗があったのか、名古屋市のどの社寺が安産祈願や腹帯祝いの習俗に関係していたのか、当時の妊婦はどの社寺を訪れて腹帯のお祓いを受けていたのか、どのような腹帯が妊婦に授与されたのか、妊婦はいつ頃腹帯を締めていたのか、といった情報が著しく不足している（恩賜財団母子愛育会（編）1975）。

さらに、柳田國男と橋浦泰雄によって書かれた産育儀礼に関する重要な民俗学の資料である『産育習俗語彙』⁶を検討すると、腹帯祝いの項目に関しては、特に愛知県の三河の額田郡と愛知県の尾張西部に位置していた海部郡では妊婦が妊娠の五カ月目又は七カ月目になると、初めて腹帯を締め、腹帯のお祝いは「オビナオシ」として知られていること、三河の西加茂郡（現在のみよし市）では妊娠の七カ月目になると、「トラゲババア」を頼んで腹帯を締める習俗があり、その腹帯祝いを「オビカケ」と呼び、腹帯は紅白、または黄色の木綿だったこと、名古屋市では腹帯祝いが「オビカケ」と呼ばれ、妊娠の五カ月目、または七カ月目頃、腹帯を締める習慣が今でもおこなわれるようになってきていることが表面的にごくわずかに記述されている（柳田他 1975 [1935]: 18-19）。

前述したように、日本全国における産育儀礼や腹帯祝いについての民俗調査の記録があり、都道府県内の各地域の産育儀礼の多様性、類似点、相違点が詳細に収集されてはいるものの、特に愛知県に関しては、名古屋市の事例は取り上げられてこなかった。そのため、名古屋市内で特に安産祈願で有名な社寺の事例を取り上げ、腹帯の習俗の変遷と現状について新たな情報を記述することには、一定の価値があると考えられる。

本研究で用いる資料は、主に2018年12月の上旬から2019年2月の下旬までに名古屋市の塩竈神社、伊奴神社、熱田神宮、興正寺の宮司・祢宜・神職や僧侶

などに対して実施した聞き取り調査により得られたものである。聞き取り調査を実施する前に、それぞれの宗教的な施設からあらかじめ許可をもらい、調査の際に発言内容を全て録音した。さらに、縁起の良い日とされる「戌の日」に安産祈願のためにそれぞれの社寺を訪れる参拝者が、腹帯としてどのようなものを持参するのか、各社寺からどのような腹帯が妊婦に授与されているのか、腹帯はどのような色彩になっているのか、腹帯に用いられる色彩にはどのような理由があるのか、伝統的な御晒と現代風の腹帯のデザイン・形態の差異、安産の祈祷や腹帯のお祓いの後、どのような色彩の判子が押されるのか、といったさまざまな点を理解するために直接参与観察をおこなった。さらに、聞き取り調査の内容を対象者の言葉に忠実に逐語録として作成した後、データを項目ごとに分析した。

III 腹帯祝いの習俗の現状

——名古屋市の社寺の事例を通して

1 塩竈神社

(1) 塩竈神社の歴史・祭神

愛知県名古屋市天白区にある塩竈神社では、安産の神とされる「塩土老翁神」⁷が祀られている。弘化年間（1844～1848年）の創建とされ、現在の社は、先祖の山田善兵衛氏が、東北地方の宮城県の鹽竈神社から祭神の分霊をいただき、名古屋市の人々のことを考慮して建てたと考えられている。塩竈神社の祭神は、名古屋市を中心に、安産と子供の守護神として大勢の人々の信仰を集めてきた（昭和区制施行50周年記念事業委員会（編）1987: 275-276）。神職の岡田氏・黒田氏の話によれば、創建当初はこの神社で他の祈祷がなされていたが、特に第二次世界大戦開始の前後から安産の祈祷がなされ始め、後に塩竈神社を訪れる参詣者の数が増えてきたという。興味深いのは、現在、塩竈神社では他の祈祷よりも、安産の祈祷と腹帯のお祓いを受けるために参拝する者の数が多いということである。ただし、筆者は、なぜ第二次世界大戦開始前後を境に、安産祈願がなされるようになったのか、祈願者の願いを満たすために神社側の関係者が意図的に新しく安産の祈祷を導入したのか、その理由を確認す

6 日本全国における産育儀礼に関する調査の記録が収められている。

7 祭神の「塩土老翁神」は「シオツチオヂノカミ」と呼ばれ、もともと塩の作り方を教えてくださった神であり、近世になってから宮城県の庶民により安産の神として篤く崇敬され始めたと言われる。

ることはできなかった。しかし、第二次世界大戦前後頃、大勢の人々が亡くなり、人口が急に減ったため、当時の人々が大勢の子供を出産する意向で、妊娠すると安産の祈禱を受ける社寺が必要になり、安産祈禱を受けたこととの関連で、出生数が急激に増加したと思われる。そこで、当時の名古屋市に住んでいた妊婦にとっては、安産祈願をする祈願先が必要になったため、塩竈神社の関係者が意図的に安産の祈禱を開始したのではないだろうか。

(2) 塩竈神社における腹帯祝いの習俗

神職の神谷氏の語るによれば、妊娠の安定期だと思われる、五カ月目の「戌の日」に、安産祈願のために塩竈神社を訪れる参拝者に腹帯として、「岩田帯(イワタオビ)」⁸や「ニンプタイ」と呼ばれる伝統的な白い色の御晒だけが授与される習俗があった。しかし、2015年前後から、伝統的な御晒とともに、巻き方・締め方がより簡単なコルセットタイプやベルトタイプの現代風のものも授与されるようになったという。授与される腹帯の長さについては、伝統的な御晒は五メートルほど、現代風のは、百二〇から百三〇センチメートルほどの長さになっているという。しかし、腹帯の長さに関しては、大幅な変更があったかどうかを確認することはできなかった。また、興味深いことに、神職の岡田氏によれば、腹帯の呼び名は妊婦の年齢により異なり、特に年配の妊婦は腹帯を「イワタオビ」と呼び、若い世代の妊婦は「フクタイ」や「ハラオビ」と呼ぶ傾向にあるが、神社側が新しく導入したコルセットタイプのものには「ねがい」、ベルトタイプのものには「いのり」という特別な呼び名が付けられたという。筆者がその理由を尋ねてみると、祢宜の山田氏(先祖の山田善兵衛氏の息子)は、参拝者は安産祈願を求めて塩竈神社に参拝するため、「祈願」という漢字の一字ずつを取って現代風のものとして命名したという。さらに、塩竈神社の受付の看板によれば、授与される腹帯の値段は、伝統的な御晒(二本分)が二千元に、ベルトタイプ(一本分)が三千元に、コルセットタイプ(一本分)が四千元に、腹帯を詰め合わせると(御晒・いのり・ねがい、各一本)八千元になるようである。

腹帯に用いられるデザイン・色彩については、神職

の黒田氏と神谷氏の話によれば、日本の神道では白い色が最も清浄な色だと考えられ、穢れていないことを象徴することから、御晒は白い色であるという。また同神社の他の神職・酒井氏は、御晒が白い色であれば、朱肉で神社の判子を押す際に見えやすく、縁起の良い色とされる「紅白」の色が作れるように白い色になっているのではないかと語った。そのほか、お祝いの柄とされる亀・鶴・犬などの絵と「岩田帯」という文字がそれぞれ青い色で、「寿」という縁起の良い文字が鮮やかな朱色で御晒にプリントされている。しかし、コルセットタイプとベルトタイプは、それぞれ柄なしでクリーム色と真っ白な色になっているようである。現在、業者から腹帯が塩竈神社に到着すると、悪い邪気、罪や穢れが腹帯自体に付かないように、毎月一回ほど、神社の神職たちにより神前に供えられ、お祓いがされているという。また、以前と同様に今でも、安産の祈禱を受けた証拠として、祈禱が終わった後、受付の神職が腹帯の上に直接朱肉で神社の判子を押す習慣は継続しているが、時代の変遷に伴い、印鑑の文字の形は、以前と比較すると、かなり変わってきたという。

神職の神谷氏によれば、現在は、伝統的な御晒よりも、現代風のものを選ぶ妊婦が多いという。御晒をぐるぐる巻くのは困難な上、特に仕事をしている妊婦にとっては職場でお晒しを巻き直すのは非常に難しいことだからといい、最近は神社からの御晒授与を希望することや、お祓いのために御晒を持参する事例はほとんどみられなくなり、御晒の腹帯はほぼ失われたという。しかし、絶対的に昔の伝統的な腹帯の習俗に従いたいという妊婦もいるため、神社側から直接御晒の授与を望まない事例がないとは言い切れないという。また、神職の酒井氏の話によれば、塩竈神社では2015年頃からこのようなベルトタイプやコルセットタイプのものが授与され始めたが、開始当時はベルトタイプのものには、安産のお守りを入れるようにポケットが付いていなかったため、後に、妊婦の利便性を考慮し、ポケット付きのもの製作を業者に依頼したという。

塩竈神社から授与される御晒の腹帯でも、現代風の腹帯でも、使用後は神社に返却することはできない状態になっている。なぜ返却することができないのかを

8 「岩田帯」と呼ばれる理由は、岩のように丈夫な赤子が生まれるような願いが込められているからである。

確認することはできなかったが、それは妊婦が一度使ったものは衛生上の問題があるためではないだろうか。腹帯を使用する必要がなくなった際には、参拝者が各自の自宅において、塩で清めて処理するように、または次の妊娠の際に同じ腹帯を再びお祓いして使うように、神職が安産のお礼参りや赤子のお宮参りの際に参拝者に勧めている。神職の話によれば、参拝者は腹帯のお祓いのために、塩竈神社をいつ訪れても神の靈的な力を同じようにあずかることができるが、参拝者は安産の犬にあやかるために、特に縁起の良い日だと思われる「戌の日」をこだわって選んで訪れる事例が多く見られる傾向にあるという。

2 伊奴神社

(1) 伊奴神社の歴史・祭神

愛知県名古屋市中区にある伊奴神社は、およそ673年頃に創建されたと推測される。この神社では主として「伊奴姫神（イヌヒメノカミ）」・「大年命（オオトシノカミ）」・「素盞鳴尊（スサノオノミコト）」が祀られる。そのうち、女神の「伊奴姫神」が安産とともに子授けのご利益を与えると信じられている。神職の大沢氏の話と神社公式の伝承によると、昔は、この地域の庄内川の氾濫により、周辺に住んでいた村人が被害に遭い、村人は旅の山伏に祈祷してもらった。その結果として、その年は洪水が起らなかった。しかし、村人はこの出来事を不思議に思い、開けてはならないと言われていた御幣のなかに一匹の犬の絵と「犬の王」という文字が書いてあったことに気づいた。翌年は、また同じようにひどい洪水となったので、再び立ち寄った山伏に、村人たちが御幣を勝手に開けていたことを打ち明け、再度の祈祷を依頼したところ、その山伏は「御幣を埋め、社を建て祀れ」といい、村人が山伏から言われたとおりにすると、その後は洪水がなくなり、周辺の村人の生活が助かったという（ムカルジー 2020: 221）。この伝説と伊奴神社の創建の歴史が深く関連していると考えられている。祀られる祭神の「イヌヒメノカミ」が人間の妊娠の際に、無事に安産できるように祝福を与えているという。宮司の稲岡氏の話によれば、創建当初から安産の祈祷がなされていたわけではないが、昭和30年（1955年）頃から安産の祈祷がなされるようになったという。ところが、

なぜ昭和30年から安産の祈祷がなされ始めたのかを確認することはできなかった。第二次世界大戦後、出生率が急に増えたことで、妊婦の祈願者の安産祈願の願いを満たすために、伊奴神社から意図的に新しく安産の祈祷の種類が導入され始めたのではないだろうか。他の神社と同様に、伊奴神社でも、安産の祈祷と腹帯のお祓いを一緒に受けるために、参拝者が妊娠の五カ月目の「戌の日」に訪れる傾向にあるという。

(2) 伊奴神社における腹帯祝いの習俗

伊奴神社の場合、安産祈願の際に妊婦に腹帯として「岩田帯（イワタオビ）」と呼ばれる伝統的な御晒の他に、マタニティ用ベルトとコルセットタイプという二種類の現代風のものが授与されるという。「岩田帯」の意義については、本神社の受付の看板には、「岩田帯を巻くことには、岩のように丈夫で健康な赤ちゃんが生まれますようにとの願いが込められております」と書かれている。神職の語りによると、御晒の初穂料は二千円であり、御晒の腹帯に縁起の良い動物とされる犬・亀・鶴などの絵がプリントされ、清浄さと穢れのない状態を象徴するために、御晒の腹帯には白色が用いられるという。腹帯に用いられる白色の深い意味について尋ねると、宮司の稲岡氏の話では、日本の伝統的な文化のなかでは清浄さが非常に重視され、神から多くのご利益や祝福をもらえるように、昔から白色が選ばれてきたという。

伊奴神社の場合、「岩田帯」の外袋は熨斗紙で包まれ、その熨斗紙には鮮やかな赤い色で「祝」というめでたい字が書かれ、鮮やかな朱肉で伊奴神社の判子が押されるほか、黒い色で「安産・子授の神様」・「伊奴神社」・「いぬ」などの文字が書かれていることが観察できた。宮司の稲岡氏によれば、昔から続く日本の文化を辿ってみると、「お祝い」、「祝」、「寿」という特定の縁起の良い文字を鮮やかな赤い色で御晒に書くことにより、お祝いの気持ちを伝える意味合いが含まれており、従来の文化をそのまま継続するために、現在では手筆⁹ではなく、縁起の良い文字である「寿」が赤い色でプリントされるようになってきたという。ただし、本神社の場合「祝」という文字を直接にお晒しの腹帯ではなく、熨斗紙だけに書く習俗が続いているという。また、御晒の長さは五メートルほどであり、

9 手筆の場合、晒しの腹帯を洗う際に鮮やかな赤い色が滲んでしまう可能性がある。

現代風のものの長さは、妊婦のお腹の大きさや着用期間とは全く関係なく、フリーサイズになっているという。さらに、妊婦が伝統的な御晒、または現代風のマタニティ用ベルトの巻き方がわからない場合、腹帯の外袋の裏面に書かれている業者のホームページを参照して、巻き方の動画をみながら、習得するように神職たちは勧めているのだという。

神職の大沢氏の話によれば、「岩田帯」と呼ばれる白い色の伝統的な御晒が占める割合は全体の一割程度にとどまっており、現在、現代風の腹帯がより一般的なものになっているという。御晒の腹帯や現代風の腹帯には、伊奴神社の判子が直接押されておらず、前もって判子が押された熨斗紙でその腹帯の外袋を包み、祈祷が終わった後、妊婦に授与されるようになってきているという。腹帯を洗う際に判子の色彩が滲んでしまう可能性があるため、腹帯自体に直接判子を押す習慣はないからである。他の神社と同様に、ここでも、現在、妊婦は御晒よりもコルセットタイプのもの、またはマタニティ用のベルトのものを自分自身で準備し、持参する事例や、社寺から現代風の腹帯を購入してお祓いしてもらいそれを受け取る事例が多く見られるという。神職の大沢氏の話によれば、妊婦により持参される現代風の多様な腹帯には、ピンク色・黄色・黒色・ネイビー色・グレー色・ベージュ色が用いられることが多いという。本神社の場合、安産のお礼参り・赤子のお宮参りの際に、もらった腹帯を返却する習慣になっているという。このことから、最近では、腹帯のお祓いを求めて神社に来る妊婦は、従来の正式なお晒しの腹帯の代わりに、巻きやすいガードルタイプ、コルセットタイプ、マタニティ用のベルトなどの機能的な腹帯を着帯することが増えており、腹帯に用いられる白い色や紅白のめでたい色彩より、自分の好みの多種多様な色彩を選んでいることがわかる。現代の妊婦は清浄と穢れない状態を表す白い色よりも、かわいらしい自分の好みの色を優先しているものと推測される。

3 熱田神宮

(1) 熱田神宮の歴史・祭神

愛知県名古屋市熱田区にある熱田神宮は日本三大神

宮の一つであり、「心のふるさと」として日本全国に知られ、古代から伊勢神宮に次ぐ神格の尊いお宮として多くの参拝者から篤く崇敬を集めてきた(篠田 1968: 21)。この神宮では主として「熱田大神」¹⁰が祀られ、草薙神剣に由来して景行天皇(71年～130年頃)の時代に創建されたと推測されている。熱田神宮の境内には、本宮を始めとして、別宮一、摂社十二、末社三十を合わせて、四十四の社がある(篠田 1968: 160)。熱田神宮の場合、現宮掌の宮本氏の話によれば、熱田神宮の境内に末社の一つである楠御前社(クスノミマエシヤ)があり、それは一般的な神社のような建物の形をしておらず、瑞垣内に楠の木だけがあり、その神聖な楠の神木に「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という国産みの夫婦神が宿ると信じられ、安産と子宝のご利益を与える神として参詣者から崇敬を集めているという。安産祈願のために熱田神宮を訪れる参拝者は、まず祈祷を受けるために、本宮の近くにある神楽殿に入り、祈祷が終わった後、本宮とともに末社の楠御前社を訪れ、氏名・年齢・安産の願いごと・参拝される日付を記入した小さな鳥居の形の祈願絵馬を奉納して、国産みの夫婦神から安産の祝福を受ける習俗があるという。ただし、いつ頃から熱田神宮で安産祈願がなされ始めたのかを確認することはできなかった。

(2) 熱田神宮における腹帯祝いの習俗

宮本氏の話によれば、神道では白い色が最も清浄な色と考えられていることから、安産の祈祷を求める妊婦には白い色の伝統的な御晒の腹帯が授与される。この御晒は「ハラオビ」あるいは「フクタイ」と呼ばれ、以前は御晒に朱肉で本神宮の判子を押していたが、御晒を洗うと滲んでしまう可能性が高いため、現在では、腹帯自体には何も押さなくなったという。さらに、以前は御晒の外袋に筆で「熱田神宮安産腹帯」という文字が書かれていたが、現代では、参拝する妊婦の数が増えたために、それらの文字が印刷されるようになったという。宮本氏や他の神職の話によれば、熱田神宮の場合、安産祈願の際、神社側から妊婦に現代風のコルセットタイプ、マタニティタイプ、ベルト式タイプ、腹巻タイプなどのものが授与されることは

¹⁰ 「熱田大神」とは、「アツタノオオカミ」と呼ばれ、日本三種の神器の一つである草薙神剣(クサナギノミツルギ)を御霊代・御神体として信仰される。日本武尊を祀るために、熱田神宮に対して参拝者が篤い信仰を持っていると考えられる。日本の神話には、草薙神剣が非常に重視されてきたものであるため、参拝者がそれを祀ることにより、高いご利益があると信仰される。

なく、以前と同様に現在も、伝統的な御晒だけが授与される習慣になっているという。ただし、時代の変遷や妊婦の利便性を考慮し、もし妊婦が伝統的な御晒を望まない場合、腹帯のお祓いを受けるために、自分の好みの実用的な腹帯を持参してもかまわないという。熱田神宮から現代風の腹帯が授与されないため、妊婦は安産の祈禱の際に持参した現代風の腹帯を、熱田神宮からもらった御晒と一緒に膝の上において同時にお祓いを受ける傾向にあるという。筆者が安産祈願と腹帯のお祓いを希望する参拝者の数を尋ねてみると、毎年参拝者の数はおよそ五千人であるという。熱田神宮では、無事に出産を終えると、安産のお礼参りや赤子のお宮参りの際に、神社から授けられた腹帯を返却することが可能である。他の社寺と同様に、ここでも、妊婦により多種多様な色彩の腹帯が持参される例が見受けられる。

4 興正寺

(1) 興正寺の歴史・祭神

愛知県名古屋市中昭和区にある興正寺¹¹という仏閣は真言密教に関係があり、貞享三年(1686)に弘法大師の五鈷杵¹²を授かった僧侶の天瑞が開祖であるとされる。もともと、興正寺は尾張徳川藩主の祈願所であったが、1982年に興正寺の境内にある五重塔が日本国の重要文化財に指定されたことで、興正寺が藩主の祈願所から一般の民衆向けの祈願所に変化し、毎年多くの参拝者を迎えており、さまざまな祈禱をおこなうために人気となったという(阿部 2008)。興正寺で三〇年ほど僧侶を務める牧野氏によれば、興正寺の本堂では、主として「阿弥陀如来(アミダニョライ)」・「弘法大師(コウボウダイシ)」・「大隋求明王(ダイズイグミョウオウ)」¹³が祀られ、そのなかでも特に大隋求明王は大勢の参拝者から「隋求さん」と呼ばれて親しまれ、安産とともに子宝のご利益を与えていると信じられているという。

牧野氏と他の僧侶の話によれば、興正寺の場合、尾張徳川家の跡取りの息子が無事に生まれるように、初めて安産の祈禱がなされたのが安産祈願の始まりであ

り、後に、庶民の祈願所になってから、一般の人々が安産祈願を求めて興正寺に参詣するようになったという。興味深いのは、高齢出産は命を落とす心配があるため、しっかりとした安産の祈禱を受けて、大隋求明王から祝福を得たいと望む人が多く、安産の祈禱を求めて興正寺を訪れる参拝者の年齢はおよそ30歳~40歳であるということである。他の社寺と同じように、興正寺でも毎日安産の祈禱がなされるが、安産の犬にあやかり、縁起の良い日とされる「戌の日」に参拝する妊婦がかなり多いという。

(2) 興正寺における腹帯祝いの習俗

牧野氏の話によれば、安産の祈禱の際に、従来の伝統を守るために、以前と同様に今でも、妊婦の祈願者に「アンザンハラオビ」と呼ばれる伝統的な白い色の御晒だけが授与され、ご利益を受けるために、御晒に「隋求さん」という経の文字を書く習慣が継続しているという。さらに、赤子が生まれることはめでたいことであるため、従来は御晒の上に鮮やかな朱肉で「寿」という縁起の良い文字を筆で書く習慣があったが、現在では、御晒を製作する業者に頼んで鮮やかな朱色で「寿」の文字、黒い色で妊婦の名前と「八事山」の文字がプリントされるようになっているという。そのため、安産祈願の際に興正寺から御晒を受けたい人は、祈禱の予約の際に、御晒の準備のためにあらかじめ僧侶に自分の氏名を知らせなければならないという。牧野氏は、御晒は清浄の意味合いを込めて白い色になっているが、詳しい長さは知らないと言った。

祈禱が終わると、祈禱を受けた証明として、朱色の判子が押された御晒を、受付の係員から受け取ることができるという。興正寺の場合、妊婦が現代風の多様な種類の腹帯を持参しても、それらに「隋求さん」という経の文字を書いて渡すことはないため、妊婦は興正寺から授与される御晒と自ら持参した現代風の腹帯を一緒に大隋求明王の前に供えてお祓いを受け、祝福を求める習俗が続いているという。また、毎月五日は興正寺の縁日であり、その日に大隋求明王から最も大きな神聖な力にあずかることができると信じられてお

11 三百年前に美しい自然に囲まれた八事山興正寺が開かれ、特に江戸時代頃この仏閣が尾張徳川家の祈願所としてみなされるようになった。

12 五鈷杵とは、密教の法具のなかの金剛杵の一種で、一般的にも最もなじみのある造形をした法具である。身を守る密教を代表する法具とされる。

13 大隋求明王とは、主に厄災除け・滅罪・安産や子宝のご利益を与えるものとして信仰される。大隋求明王の経は『隨求陀羅尼經(ズイグダラニキョウ)』であり、それを唱えることにより、胎児が無事生まれて無病延寿になるとされる。

り、業者から送られてきた腹帯のお祓いはこの日になされるという。このほか、出産が無事に終わると、安産のお礼参り、赤子のお宮参りや虫封じの祈祷¹⁴の際に、興正寺から授けられた腹帯を返却する習慣があるという。

IV 考察

各社寺の歴史と祭神の視点から比較検討すると、本研究ノートで事例として取り上げた愛知県名古屋市の塩竈神社(1844年～1848年頃創建)・伊奴神社(673年頃創建)・熱田神宮(71年～130年頃創建)・興正寺(1686年頃創建)は創建の時代がそれぞれ異なること、いずれも創建当初は安産の祈祷、腹帯のお祓いや他の産育儀礼がなされていなかったことを明らかにすることができた。その他、特に第二次世界大戦開始の前後に、安産の祈祷を求める参拝者が増えたことで、腹帯のお祓いを受けるために各社寺に参詣する人も増えたことが明らかになった。また、社寺によって、安産のご利益を与える神々が異なることもわかった。例えば、塩竈神社の場合は翁の「塩土老翁神」、伊奴神社の場合は女神の「伊奴姫神」、熱田神宮の場合は「熱田大神」と国産みの夫婦神の「イザナギノミコト」・「イザナミノミコト」、興正寺の場合は「大隋求明王」であった。さらに、安産の祈祷・腹帯のお祓いの習俗を比較すると、興正寺を除き、どこでも予約なしで、毎日安産の祈祷や腹帯のお祓いがなされる。また、どの社寺でも、動物の犬にあやかるために、最も縁起の良い日とされる妊娠五カ月目の「戌の日」が妊婦により選ばれ、その特定の日に安産祈願と腹帯のお祓いを同時に済ませる参拝者がよく見られることが明らかになった。

また、各社寺における腹帯祝いの習俗の変化・現状、腹帯に用いられる色彩、腹帯に押す判子の習俗などを見ると、最近では、腹帯として伝統的な御晒よりも、簡単に脱ぎ着できるガードルタイプのものや簡単に締められるコルセットタイプのもの、マタニティ用のベルト、腹巻きタイプのものが手軽で実用的なものとして好まれ、最近の妊婦はお祓いを受けるためにこのような現代風の腹帯を持参することが多いことが明

らかになった。例えば、塩竈神社の場合は、御晒の腹帯の他に現代風の腹帯の種類としてコルセットタイプ・ベルトタイプのものが、伊奴神社の場合は「岩田帯」と呼ばれる伝統的な御晒の腹帯の他にマタニティタイプとコルセットタイプのものが、熱田神宮と興正寺の場合は、以前と同様に今でも、伝統的な御晒だけが妊婦に授与される習慣になっていることがわかった。すなわち、塩竈神社と伊奴神社の関係者は、時代の変遷に呼応して意図的に新しい現代風の腹帯を追加したが、同じ名古屋市にある熱田神宮と興正寺の場合は、腹帯のお祓いを受けるために、妊婦の祈願者が自分の好みの形態の腹帯を持参することはあっても、これらの社寺の関係者たちは、従来の腹帯の伝統的な習俗をそのまま守り続けるために、現代風の腹帯の種類を導入しようとはしないという事実も明らかにすることができた。

さらに、なぜ現代の妊婦は社寺側から現代風の腹帯を受けるのか、なぜ妊婦はお祓いを受ける際に伝統的な御晒よりも、現代風の腹帯のほうを持参するのかを各社寺の関係者から聞いた話や参与観察の結果によって検討するならば、時代の変遷のなかで、家の外で働く妊婦が増えつつあること、拡大家族から核家族への移行により、自分の両親と離れて生活する状態が生じていること、御晒の巻き方はそれほど簡単に習得することはできず、職場で御晒を巻き直すのも非常に困難であることから、大勢の妊婦が腹帯として御晒よりも、現代風の多様な種類のコルセットタイプ・ベルトタイプ・ガードルタイプのような手軽なものを購入していると考えられる。その結果として、現在、安産祈願の際に各社寺を訪れる妊婦は自分の好みの形態の腹帯を持参するか、あるいは社寺から御晒の腹帯の代わりに、現代風の腹帯をもらい受けるようになっているものと推測される。

腹帯に用いられる色彩・意義については、神道の視点から考えると、白い色は穢れていないことを表す色彩と見なされることから、御晒の腹帯に白い色が用いられることが多いようである。言い換えれば、日本の伝統的な文化のなかでは清浄の意味合いが非常に重視されることが、一般的に御晒に白い色が用いられることに関係していることが明らかになった。本研究ノー

¹⁴ 虫封じの祈祷とは、江戸時代から始まった祈祷の習慣であり、機嫌が悪くなりやすい赤ちゃんや、じっくり眠らずいつもグズル子供の手のひらに、所定の文字や梵字とご真言を書き、お経を唱えてしばらくすると、手または指先から白い糸状の物が出て御祈禱を終える意味を表す。

トで取り上げた各社寺の事例に注目すると、どこでも伝統的な御晒は白い色であるほか、場合により白い色の御晒には鮮やかな朱色で「寿」という縁起の良い文字が書かれること、朱肉の判子が押されることという共通点がみられることを明らかにすることができた。また、「紅白」というめでたい色彩を重視して、現在でも、社寺から安産祈願の際に授与される白い色の御晒の腹帯には朱肉の判子が押されたり朱色で縁起の良い文字が書かれたりすることや、朱色で「寿」という文字がプリントされる事実を明確にすることができた。ただし、伝統的な御晒を除き、時代の変遷に伴い新しく導入された多様な種類の腹帯には、赤い色や白い色よりは、ピンク色・黄色・クリーム色・黒色・紺色などが用いられることが多いため、現在では、縁起の色彩に対する妊婦のこだわりは従来ほど存在していないこと、時代の変遷の影響で、赤い色・白い色・紅白などの意味合いが失われつつあることも明確にすることができた。

さらに、腹帯の呼び名については、塩竈神社の場合は、神社側からコルセットタイプのものには「ねがい」、ベルトタイプのものには「いのり」という呼び名が付けられ、伝統的な御晒の呼び名は、訪れる妊婦の年齢により異なっていた。また伊奴神社の場合は、新しく導入された現代風の腹帯には特別な呼び名が付けられていないが、伝統的な御晒は岩のように丈夫な赤子が生まれるようにとの意味を込めて「イワタオビ」と呼ばれていた。熱田神宮の場合は、塩竈神社と同様に、伝統的な御晒は「ハラオビ」・「フクタイ」と呼ばれるほか、興正寺の場合は、伝統的な御晒は「アンザンハラオビ」と呼ばれることが明確になった。つまり、各社寺ごとに腹帯の呼び名が一部異なることを明確にすることができた。

最後に、腹帯に押される判子・返却の習俗の視点から見ると、塩竈神社の場合、安産の祈禱が終わった後、証拠としてお祓いされた腹帯に直接朱肉で判子が押される。ただし、伊奴神社の場合、腹帯に直接伊奴神社の判子が押されることはなく、前もって判子が押された熨斗紙で腹帯を包んで妊婦に授与している。また、熱田神宮の事例を見ると、以前は御晒に朱肉で熱田神宮の判子を押ししていたが、御晒を洗うと朱色が滲んでしまう可能性が高いため、現在では授与する御晒には何も押さず、妊婦により個人的に持参される腹帯にも何も押さないことが明確になった。一方で、興正寺の場合は、塩竈神社と同じように、安産の祈禱が終

わったら、その証拠として、御晒と妊婦により持参された現代風の腹帯に、受付の係員が朱色の判子を押しすることがわかった。腹帯の処分に関しては、塩竈神社の事例を除き、全ての各社寺で、無事に出産を終えたら、安産のお礼参りや赤子のお宮参りの際にもらい受けた腹帯を社寺に返却することが可能になっていることが明らかになった。

V 今後の課題

本研究ノートでは、愛知県名古屋市にある塩竈神社・伊奴神社・熱田神宮・興正寺の事例を通して、安産祈願と深く関連する腹帯の習俗が、時代の変遷に伴いどのような変化を遂げたのかを報告した。四つの事例に注目することで、同じ名古屋市にある社寺における腹帯の習俗にどのような共通点と相違点が見られるのかを検討することができた。各社寺は異なる歴史背景のもと、時代の変遷に対応して、社寺側から新しい腹帯の種類が追加されるようになった社寺と、反対に従来の伝統的な腹帯の習俗を守り続けるために、現代風の腹帯を導入しない社寺があることや、腹帯に用いられる色彩の多様な変化、腹帯に押す判子の習俗の変化などを詳細に記述するように試みた。また、最後に時代の変遷のなかで、いくら腹帯祝いの習俗のあり方に細かな変化があっても、すべての寺社の事例において、安定期とされる妊娠五カ月目、特に縁起の良い日だと考えられている「戌の日」に、安産の祈禱や腹帯のお祓いを受けるために各社寺を訪れる参拝者が多くみられることは変わらないという動向を指摘することができた。さらに、伝統的な御晒からマタニティ用のもの・コルセットタイプのもの・腹巻タイプのものへの移行、腹帯に用いられる色彩の多様化が生じて、現在でも腹帯のお祓いが継続していることから、女性が妊娠する限り、安産の祈禱と腹帯のお祓いを受けて、お腹に腹帯を締める習慣は続いていくかもしれないと筆者は考える。

今後は、最近の腹帯祝いの習俗の現状をより深く把握するために、名古屋市の他の社寺の事例を増やして、各社寺の関係者に対して徹底的に聞き取り調査を実施し、腹帯祝いの習俗について詳細な情報を得、比較検討し、どの点が共通しているのか、どの点が異なっているのかを検討したい。さらに、社寺の語りからだけではなく、縁起の良い日とされる「戌の日」に、これらの各社寺を訪れる妊婦の祈願者を対象にし

て、質問票調査や聞き取り調査を実施することにより、彼らの語りから、最近の妊婦が腹帯の習俗についてどのような思いを持っているのか、なぜ腹帯として現代風の腹帯を優先しているのか、腹帯のお祓いに関する詳細な情報をどのように得ているのか、なぜ安産の祈祷の際に腹帯のお祓いを受けるのが大切だと思っているのか、といった点に注目し、検討することを考えている。

謝辞

本研究ノートを終えるにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた愛知県名古屋市の塩竈神社、伊奴神社、熱田神社、興正寺の各神職・宮司・祢宜や僧侶と受付の係員に対して、心より厚くお礼を申し上げます。特に聞き取り調査の際には、社寺ごとの歴史や由来について詳細に教えていただき、それぞれの社寺を案内していただいたほか、腹帯の撮影を許可していただいた。また、本研究ノートの執筆にあたっては、査読者から貴重なご助言・ご指摘をいただいた。

参考文献

阿部 英樹

2008 『江戸時代の八事山興正寺—八事文庫文書にみる尾張高野の歩み—』勁草書房。

恩賜財団母子愛育会(編)

1975 『日本産育習俗資料集成』第一法規出版。

鎌田 久子・管沼 ひろ子・坂倉 啓夫・宮里 和子・古川 裕子

1990 『日本人の子産み・子育て—いま・むかし—』勁

草書房。

篠田 康雄

1968 『熱田神宮』学生社。

昭和区制施行50周年記念事業委員会(編)

1987 『昭和区誌』昭和区制施行50周年記念事業委員会：名古屋市昭和区役所。

田口 裕子

2011 「現代における安産祈願の実態とその背景」『神道宗教』(220-221): 107-129。

内藤 美奈

1999 「対馬の産育習俗(2)八幡宮神社の腹帯祝いと初参り」『女性と経験』(24): 93-99。

2010 「住吉大社の腹帯に関して」『女性と経験』(35): 111-116。

2013 「腹帯の赤—赤色が持つ呪力について—」『女性と経験』(38): 52-64。

ムカルジー ヒヤ

2020 「都市部における民俗的信仰実践と神社—愛知県名古屋市における安産祈願を中心に—」『名古屋大学人文学フォーラム』(3): 217-225。

柳田 國男・橋浦 泰雄

1935 『産育習俗語彙』愛育会。

(参照ウェブサイト)

<https://www.atsutajingu.or.jp/jingu/> (熱田神宮ホームページ)

<https://inu-jinjya.or.jp/> (伊奴神社のホームページ)

<http://www.siogamajinja.or.jp/> (塩竈神社のホームページ)

<https://www.koushoji.or.jp> (興正寺のホームページ)

Keywords

Aichi Prefecture, Nagoya City, Haraobi Rituals, Childbirth Customs, Case Study